



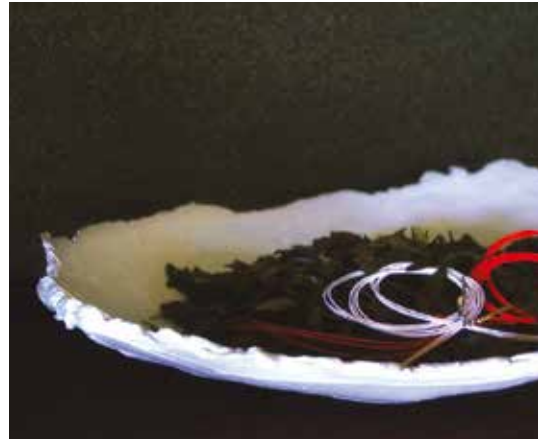
14歳になったころ、お母さんがまた再婚して地元の中學に戻るようになって…。付き合ってた彼氏に「20歳のオマエが想像できない」みたいなこといわれてショック…。もお、まわりの仲間はすっごく大人っぽくなってたし、私ひとり違う景色見てるような気がしてた。でもずっと一緒だった大親友のおかげで、オシャレに目覚めたりして、網タイツはセクシーでカッコイイ～みたいな今は生きてて一番の幸せな気持ちでいっぱい！なんか女の子ってそんな感じするじゃない！？



## 松原邸 ■ 上粕エリア

上粕(かみこま)の環濠集落(かנגょうしゅうらく)内にあり、上粕小学校南側に位置する。当家に伝わる家相図『松原小藤次改正新宅地図』には明治三十四年と記され、この頃から建築を始めたと考えられる。長屋門と土塀はさらに古い時代のもの。松原小藤次氏は、富豪ながら華美なものは好まず隠れた中にも品の良さを求める方で、柱一本から全国を探し回ったという。ガラス戸より雨戸が内側にあることなどから、のちに増築されたと思われる部分もある。おくどさんや箱階段、長い廊下など、当時の生活をうかがい知るものがそのまま残る日本家屋、使わせていただいた意義は大きい。松原邸はこれが初めての一般公開だった。





「ハレとケ」のハレ(晴れ)は特別な日、ケ(褻)はふだんの生活である「日常」を表しています。松原邸の日常にはいろんな金魚たちが暮らしていました。そして、床の間ではたくさんの晴れの日があった事を想像しうれしい気持ちになります。あなたにとって最近の晴れの日はどんな事でしたか？ たくさんお祝いしましたか？



いのちのぬくもりを感じる和紙、見るたびに違う表情を見せる墨。土から生まれ、土へと還る、受け継がれるいのちの営みをテーマに制作してきました。今回の作品は、「木津川の流れ」をテーマに展開。紙の重なり、にじみやたまり、コラージュなどのさまざまな墨の表現方法を用いた作品は、部屋に入ってくる風や光によって刻々と変化します。静と動、光と影が生み出す紙と墨のさまざまな表情に、いのちの育み、多くの人々の人生や思いを受け継ぎ、時空を超えて脈々と流れゆく「木津川の流れ」に重ね合わせて表現しました。



水性木版を用い、人肌をテーマにしています。  
良き時代をへた松原邸の中でその温もりを感じ、想像して頂けたらと思います。



この木津川という街と出会い、はるか遠い昔から続いてきた歴史のある街だと感じました。その長い歴史の中に在った、街、風景、街並み。幾度となく足を運んで、わたしという人間を通じて思えた事柄のひとつ、ふたつを、残したいなと感じました。「造本」というあらわしかたをしています。手に持ったときの喜び、ページをめくるときのどきどき、わくわく。紙のあたたかみや、文字の美しさにどきどき、わくわく。数枚、数十枚の紙の束から広がる無限大の世界を伝えられればと思います。



松原邸の蔵で何十年と眠っていた紙を使いました。変化する紙の色彩、変わらない子供の遊び、目の前の物を見て、何を感じて何をしたいとおもうのか、子供たちが暮らしている様子を造りました。